



聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

「地域を支えるお母さん」

た なべ てつ こ
田辺 哲子

1912年(大正元年)
新潟県三条市生まれ
東小岩在住



100年前に生まれました

わたしはね、今年100歳になります。「長生きのコツはなんですか」とよく聞かれるけれど、そんなものはありません。牛乳は嫌い、かぼちゃは嫌い、とにかく栄養になるようなものは全部嫌いなんです。夜中までテレビを見たり、本を読んだり、食事をしたりして、眠たい時に寝る。体操も散歩もしません。

でも考えてみると、主人が戦争中に陸軍糧秣廠で胚芽米の研究をしていたから、いやでも胚芽米を食べていた。主人は平成16年に100歳で亡くなったんですけれど、二人とも食べていたから、それが体に良かったんじゃないでしょうかね。

主人とは、見合いどころか、わたし自身は写真すら見ないままで結婚しました。知り合いが間に入って、写真と反物を持って親のところへ縁談を持って来る。一度は形だけ断って、もう一度持って来たら承諾する。まわりの人もそうやって結婚していました。どんな人か分からないけれど、親の言うとおりにしておけば、離婚してもいつでも実家に帰って来られるくらいの気持ちで結婚したのに、ずいぶん長い間添い遂げましたね。

わたしは、大正元年に新潟県三条市で金物問屋の長女として生まれました。戸籍の名前はテツです。はじめての子を生まれてすぐに亡くした両親が、次の子には強い名前をと、付けたそうです。でも、テツでは男の子に間違えられるので、ずっと哲子。弟や妹も生まれたけれど、わたしは一人目だから「金物問屋のお姉さん」として一番威張っていました。

両親、祖父母、兄弟、その他に番頭さんや女中さん、兄弟の乳母たちも一緒に生活する大所帯でした。跡取り娘だった母は、一番番頭だった父と結婚させられたそうです。

当時は食事をするにもね、店の主人ひとりが、奥座敷に座って食べていたんですよ。祖父が生きている時は祖父。亡くなってからは父が座っていました。その他の家族や住み込みの使用人は、板張りの台所の続き間で個別のお膳で食べていました。夏場の父の食事中は、弟の嫁や女中さんがずっとうちわで扇いでいましたよ。

戦後の弟の時代にはそんな風景もなくなっていたけれ

ど、それが当たり前と思っていた時代があったんですよ。

故郷より田舎な小岩

昭和6年に高等女学校を出た時、得意な英語を活かして通訳になろうと思って、女子大に進学するため叔母を頼って上京しました。でも、3番目の弟が突然亡くなってしまって、すぐに帰郷させられました。子どもを失ったショックで両親が、「なんでも好きにさせてやるから東京には行くな」と言うので、また受験すればいいやと思って。でも、大学はそれきりになっちゃいました。

東京には、主人と結婚してからまた出てきました。糧秣廠の本廠が越中島だったので、小岩に住みましたが、昭和初期の小岩は駅前に四軒長屋があったきり何もなかったんです。ガスも水道もない井戸水での生活で、「三条よりも田舎だね」と母もびっくりしていましたよ。

1男3女に恵まれましたが、主人は各地を飛び回っていてなかなか家には帰って来ることができなかったし、戦争もひどくなってきて、子どもたちと三条市の実家に疎開しました。店は番頭さんも女中さんも誰もいなくなっていて、以前の活気はなくなっていました。けれど、物が手に入らなくなってからも、父は「うちが食べられなければ、みんなも食べられないのだから」と疎開してくる人を受け入れて、町内の人にもお酒や食べ物をふるまったりしていました。

終戦時、主人は北海道に赴任していました。本当は、わたしたちも後から北海道に行く予定だったのですが、主人が東京で会社員になったので、知り合いのついでにばらくは埼玉の鴻巣に住みました。そして昭和24年、長女の中学進学を機に小岩に戻ってきたんです。

婦人会の会長に、そして町会長にも

当時小岩では、婦人会の活動が活発でした。消費者運動をしたり、バザー、お料理教室、婦人の地位向上のために映画会まで、いろいろ自分たちで考えてやりました。市川房枝さんの選挙活動もしましたね。わたしも会員として活動をしていました。

ところが、昭和26年一番下の娘が小学校に入学する

